

総選挙は最終段階

盛田 常夫

総選挙の概観

この4月に総選挙がおこなわれる。1990年の第1回総選挙から数えて、これが4回目になる。第一回選挙ではMDF（ハンガリー民主連合）が政権を握った。しかし、文人が多いこの政党は、お金の使い方を知らず、国家統治には適さないという厳しい判断が下され、1994年の第2回選挙では文字通り惨敗した。やはり政治にはプロが必要ということで、社会党の復帰ということになった。この選挙ではMSZP（社会党）が単独過半数を獲得し、自由民主連合（SZDSZ）と組んで、実に議席の3分の2を占め、圧倒的な権力を手中にした。当時、FIDESZ（青年民主連合）もかなりの支持を集めていたが、選挙が近づくとつれ支持率は急減し、苦杯を喫した。

前回の1998年の選挙では、単独政党としてMSZPが最大の得票数を獲得したが、やり直し小選挙区でFIDESZはFKGP（小地主党）とMDFと連携をとったことで、過半数の議席を制した。FIDESZは念願の政権奪取に成功し、これでハンガリーの主要な政党がすべて一度は政権に就くという現象になった。

選挙の関心は、果たしてFIDESZが政権を維持できるか、それともMSZPが政権を奪取するかにある。もしFIDESZが維持すれば、体制転換以後、ハンガリーのみならず、中欧諸国のなかで、初めて政権の継続が実現することになる。この意味で、4月の総選挙結果は興味深い。

政権交代の法則

なぜ旧社会主義国の選挙で、毎回、政権政党が変わるのか。これは次のように理解することができる。

どの政権も市場経済化への道を推進する以外にないが、その体制転換が社会的なひずみを生み出す。したがって、野党はこれを攻撃し、社会的弱者の救済を掲げることで、政権が奪取される。どの国もほとんど同じパターンで、これまで政権交代がおこなわれてきた。昨年ポーランドの総選挙もこの例外ではない。明らかに、これは「体制転換における政治法則（第一法則）」である。

もっとも、このようにして各政党が一度は政権に就くことで、政党間の相互監視のシステムが出来上がっているといえよう。旧社会主義国では、体制転換以後も検察制度が弱く、贈収賄や地位の利用、インサイダー情報を利用した取引や民営化での不当な利益の獲得、ロビー活動による金銭授受などが、ほとんど摘発されないまま蔓延している。政権政党の腐敗は政権交代によってしか実現できないという「体制転換の第二法則」が機能してきた。

社会党も例外ではない。というより、社会党政権時代には、大規模な民営化（ほぼ100億ドル）がおこなわれているから、かなりの金額が社会党の有力者に流れたことが予想される。事実、ホルン党首の二人の副党首は一躍大金持ちになり、これままずいというので、社会党の役職から降りることになった。

不可解なポシュタバンク事件

それにしても解せないのは、ポシュタバンク事件である。総額 1500 億フォリントを超える損失を出し、ウィーンに事実上逃亡しているプリンツ・ガーボル（元ポシュタバンク頭取）には、逮捕状がだされていないのはもちろん、任意取調べも予定されていない。12 月にはヴァツィ通りで彼を見かけたが、自由に国を出入りしているようだ。

現政権が最初の仕事として手がけたのは、ポシュタバンクのプリンツ追放だった。しかし、その後は完全に追求の手を止めた。逆に、政府は 1500 億フォリントの損失を、ポシュタバンクの会計監査を担当していた歴代会計会社 4 社に求める訴訟を起こしている。経営者の責任が誰一人問われることなく、会計会社だけが損害補償を求められている。これは理解しがたい。

ポシュタバンク事件については、どの政党も積極的に切り出して、追及することはしない。あたかも腫れ物に触るがごとく。明らかに、社会党や小地主党の政治家だけでなく、現政権の有力政治家も、ポシュタバンク（プリンツ・ガーボル）に並々ならぬ世話になったからであろう。ロシアであれば、とっくにプリンツは暗殺されているが、そこはハンガリー。皆が口を閉じ、ポシュタバンクのことは忘れようというのが、暗黙の了解事項のようだ。しかしたまらないのは、損害請求をされている会計会社だ。

今回の選挙は世代の闘い

社会党と FIDESZ の支持率は拮抗しているが、次第に FIDESZ 有利の傾向が見えている。最近の社会党の記者会見で顔を揃えるのは、ホルン前首相、コヴァチ党首、メジェシ首相候補の三名である。70 歳、62 歳、59 歳の、それも旧体制で重職を経験してきた政治家集団だ。

これにたいして、FIDESZ は 30 歳台と 40 歳台が中心を担う政党だ。社会党の顔は、誰が見ても新鮮味に欠ける。「昔の名前で出ています」という調子だ。日本ではまだまだやれる歳だが、ハンガリーでは隠居の歳だ。

EU 加盟を控えた新時代を担う政権として、平均 64 歳の顔、それも旧体制から党と政府の要職に会った顔が、魅力あるはずがない。しかし、社会党には彼らに代わる若手が育っていない。それが社会党の致命的な弱点なのだ。

もちろん、FIDESZ にも弱点がある。オルバンの強引な政局運営は与野党の話し合いを基礎にする慣習を破るものとして評判がよくない。また、オルバンの父の砂利鉱区購入や高速道路建設への砂利納入など、スキャンダル話題にも事欠かない。それが昨年 1 年の FIDESZ 低迷の原因でもある。

しかし、ここに来て、FIDESZ が支持率を伸ばしているのは、敵失によるところが大きい。30-40 歳台と 60 歳台の世代の闘争なのだ。いろいろ問題はあるが、かといって昔の世代に権力を渡すというのも賢い選択にはならない。有権者がそう考えているとすれば、支持率の傾向は納得できる。

戦術に長ける FIDESZ

ちょうど1年前、FIDESZは連立政党の小地主党スキャンダルに紛れて、支持率が急落した。以後、小地主党を切り捨てるという戦術が功を奏した。すべての責任は小地主党あり、FIDESZは迷惑を被ったという姿勢を通した。これで小地主党は議席獲得が難しい水準にまで支持率が落ち、FIDESZは支持率を回復した。

また、各種のメディア戦術でも、有権者に訴える戦術でも、他の政党の一步先を行っている。このままの支持率が推移すれば、体制転換以後の中東欧の総選挙で初めて、政権の継続が実現することになる。果たして、政権交代の法則が破られるのか、それとも法則が依然として貫徹するのか。ハンガリーの総選挙は、この視点からも興味深い。

2002年1月